



調剤薬局運営と福祉用具レン

タルなどを展開する大平(小城市)は11月、福岡県久留米市に次いで県外2カ所目となる福祉用具の営業所を福岡市に開設する。これからの高齢化社会を見据え、地域の医療と福祉を支えるビジネスをどう展開するのかが、副島広幸社長(40)に今後の戦略を聞いた。

福岡への進出を本格化させている。事業拡大の狙いは。

日本の65歳以上の高齢者人口は、2025年には3500万人を超える。佐賀県内ではその

医療と福祉 福岡進出

後しばらくしてピークを迎えると思われる。だが、国全体や福岡都市圏の高齢者数が最も多くなる時期は、佐賀よりも遅れて来るだろう。福祉用具に関するビジネスチャンスを見ると、今の時期に新たな市場に挑戦すべきと考えた。

大平社長 副島 広幸氏

現在、約50人いる福祉用具の営業社員を、今後5年ほどで100人程度にまで増やす見込みだ。調剤薬局については、まだ佐賀県内で拡大の余地がある。この分野での県外進出は、今のところ計画していない。

一 大企業と比べ、県内の中

さが政経インタビュー

高齢化進行に先回り

小企業では採用活動に苦戦しているところが多い。人材確保は企業の事業拡大にとって生命線でもある。採用は最も力を入れている経営事項の一つ。就職活動をしている学生に対し、会社説明会などを通じて会社が求める人材像や、社内の雰囲気可能な限り理解してもらうように努めている。会社と新人社員のミスマッチ

の四つが基準。これら新人社員の人材要件は、30歳前後で顧客から高い評価をもらっている若手社員らが中心となって決めている。新人と最も接するのは彼らだからだ。学生らがこの要件に共感してくれるよう、企業説明会などでも若手社員が自分たちの言葉で説明している。



そえじま・ひろゆき 1972年生まれ。96年、大平入社。2004年、代表取締役社長。薬剤師。佐賀市。

子をなくすためだ。せっかく採用しても、辞めてしまってもつたいない。

数年前からこのような取り組みを強化したことで、入社3年以内の離職率が格段に低くなった。また、最近入社試験のエントリーが千人を超えるようになった。採用活動の強化に手応えを感じている。

一 大平が求める人材とは。「実践行動力」「信頼構築力」「堅実指向」「ポジティブ思考」

患者視点で地域の医療と福祉を考えた中で、医療モール開発の構想が生まれた。現在は脳神経外科、眼科、小児・アレルギー科、消化器内科・外科、耳鼻咽喉科の5医院が開業している。今後の構想としては、皮膚科や心療内科、人工透析など、さらに3医院程度の開業を見込んでいる。地域の安心安全を支える重要な医療拠点となるよう、さらなる充実を図りたい。

(聞き手・星野一裕)